

現代フランス語の形容詞 *simple* の用法について

山 本 大 地

0. はじめに

付加形容詞の位置の問題を扱った Nølke (1996 : 38) は « Peu de questions linguistiques ont fait couler autant d'encre que la position de l'adjectif épithète » 「言語研究において付加形容詞の位置ほど取り上げられたテーマはそうない」と述べ、6 ページに渡り先行研究の提案を紹介したうえで、自らこの問題に対して新たな説明を試みている。付加形容詞の前置・後置のメカニズムがいかに複雑な問題であるか伺える。

本稿で取り上げる形容詞 *simple* も、名詞に対して前置修飾、後置修飾どちらも可能であり、付加形容詞の位置の問題に深く関わる形容詞である。

- (1) a. un soldat simple un simple soldat
b. une robe simple une simple robe
(Milner 1967 : 275)

さらに意味を考慮すると、*simple* は位置によって意味が異なる形容詞である。Blinkenberg (1933) に倣って、形容詞の位置と意味の関係を整理すると、次の四通りの形容詞が存在することになる。

- I . Deux ordres — deux valeurs
II . Deux ordres — une valeur
III . Un ordre — deux valeurs
IV . Un ordre — une valeur

simple は、前置、後置どちらも可能でかつ意味が異なる形容詞であり、I に分類される。この種の形容詞は *pauvre*、*sale*、*pareil*、*gros*、*vrai*、*propre* 等いくつも挙げることができる。また例えば色彩を表す形容詞のように、原則後置修飾しか認めないとされる形容詞でも *de vertes olives* のように前置修飾が可能な場合を見つけることができる。付加形容詞の位置を決定する要因については、様々な説明が試みられている。伝統的なものは、前置修飾は主観的、後置修飾は客観的という主観と客観の対立による説明である。例えば *un pauvre homme* 「かわいそうな男」には話し手の捉え方が大きく反映しており、*un homme pauvre* 「貧乏な男」はお金がないという事実に基

づいている。付加形容詞の位置の問題を中心に考察した Reiner (1968 : 375) はこの立場に近い。

- (2) « la combinaison AS (...) exprime l'attitude d'absorption du sujet parlant et (...) la combinaison SA correspond à l'attitude d'objectivation »

しかし、「主観的」「客観的」という概念が不明瞭であり、また直観的にもこの対立に当てはまらないケースは存在する。その後も Waugh (1977)、Foresgren (1978)、Wilmet (1993)、Larsson (1994) 等付加形容詞の位置の問題を扱った研究が次々に現れている。

このように形容詞の位置と意味の関係は容易に解決できる問題ではないが、個々の形容詞の観察を積み重ねていかなければ、解決にたどり着けないのも事実である。本稿はその一環として現代フランス語の形容詞 *simple* を取り上げる。

本稿の構成は以下の通りである。まず形容詞 *simple* に言及している三つの研究を概観し、*simple* についてすでに指摘されている現象、またその意味的特徴を把握する。次に *simple* の意味用法を後置修飾、前置修飾合わせて五つに分類し、それぞれの用法の関連性を捉えながら記述する。最後に名詞句における *simple* の位置の問題に立ち戻り若干の考察を加える。

1. 先行研究

1.1. Milner (1967)

管見の限り、Milner (1967) が本格的に形容詞 *simple* に言及した、最初の研究である。位置によって意味が異なる形容詞は前節で挙げたように *pauvre*、*sale*、*pareil*、*gros*、*vrai*、*propre* 等多く存在するが、Milner によると *simple* は *ancien*、*vrai*、*vague*、*apparent* といった形容詞とともに、独自の閉じたクラスを形成する。これらの形容詞に共通する特徴をいくつか挙げているが、そのなかでもとりわけ重要なのは、形態的に対応する副詞によって言い換え可能なことである。

- (3) a. Jean est un ancien professeur.
b. Ceci est une simple robe.

- c. Ceci est une apparente folie.
- d. Jean est un faux prêtre.
- e. Jean est un vrai héros.
- (4) a. Jean était anciennement un professeur.
- b. Ceci est une robe tout simplement.
- c. Ceci est apparemment une folie.
- d. Jean est faussement un prêtre.
- e. Jean est vraiment un héros. (Milner 1967 : 277)

さらに言い換えに適する副詞は、様態副詞ではなくモダリティ副詞 (adverbe de modalité) に当たる。このような意味に相当することから、Milner は simple をはじめとする一群の形容詞を *adjectif modal* と呼ぶ。最終的に Milner は *adjectif modal* が生じた過程を、後置修飾から前置修飾へ直接結びつけるのではなく *adjectif non-modal* (une robe simple) > モダリティ副詞 (simplement) > *adjectif modal* (une simple robe) というように、モダリティ副詞を介して生じたものと結論づけている。

1.2. Lenepveu (2002)

Lenepveu (2002) は Milner 同様、これらの形容詞の副詞的な性質に注目した研究である。Milner が扱っている形容詞以外に *triste*、*stupide* にまで考察対象を広げている。*adjectif modal* がモダリティ副詞の意味に相当するという Milner の主張に加え、後置修飾と様態副詞との相関関係を指摘する。

- (5) a. Marie avait un regard stupide.
- b. Marie me regardait stupidement.
- (Lenepveu 2002 : 47)

さらに simple に関して、前置修飾の simple はモダリティ副詞 *simplement* のどの用法に相当するかという点まで考察を進めている。モダリティ副詞としての *simplement* には a 量的な解釈と b 質的な解釈があるが、Lenepveu によると、simple の前置修飾と言い換えられる *simplement* は質的な解釈に近いという。

- (6) a. Il vient simplement le dimanche.
- b. « Or Assad, depuis 17 ans, veut tout simplement le Liban. » (Lenepveu 2002 : 65-66)

1.3. Noailly (2002)

Noailly (2002) は、形容詞 simple を単独で扱った唯一の論考である。Noailly は前置修飾の simple は « *adjectif sans qualité* » (cf. Schnedecker 2002) であり、*dénomination* 「命名行為」という談話調整の役割を担うと主張する。simple と結合する名詞の意味的な相性、simple の論証的価値、ne...que との組み合わせ、seul と

の比較等、上記二論文と異なる様々な観点から simple を考察している。Noailly の主張の中で、simple をヘッジ表現 (*enclosure*) の一種とみなしている点が興味深い。形容詞 simple の前置修飾の新たな側面を見出そうとする視点である。

以上 simple に言及している研究を概観したが、ここで先行研究で明らかにされていない点を指摘しておきたい。それは、前置修飾と後置修飾の意味価値の関連性である。前置修飾と後置修飾が異なった意味価値をもつことは事実であるが、どの論考においてもそれを前提に論が進められており、両者が完全に切り離されて考察されている。しかし同じ形態である以上、前置修飾と後置修飾につながりがあると考えることは不自然ではないだろう。両者の意味価値の間に関連性はあるのか、あるのであればどのような種類の関係性を見出せるのか、それを考えることは、simple がもつ用法全体の中に前置修飾の simple の用法を位置づけることであり、前置修飾の simple の意味特徴がより明確になるのではないだろうか。

本稿では、この点を掘り下げるために、後置修飾がもつ意味用法から前置の意味用法まで一通り考察を行う。その際、各用法の類似点と相違点を意識的に記述する。

考察を行う前に、simple の語源について少し触れておきたい。simple はラテン語の形容詞 *simplex* に由来し、さらにさかのぼると *sim-* は「一」を表す印欧語根 **sem-* につながる。*sem-* は他にも *ensemble* や *singulier* といった語に含まれている。以下の論において、simple のどの用法においても何らかの形で「一」とのつながりを見出すことができることが明らかになる。

2. simple の意味用法

simple の意味用法を記述するに当たって、後置修飾をさらに二つの用法に、前置修飾を三つの用法に下位区分する。したがって、合計五つの用法に分けて以下記述を行う。

2.1. 後置修飾

2.1.1. 用法 A 「一つのみの要素から成る X」

- (7) a. billet simple
- b. mot simple
- c. couleur simple
- d. nœud simple (Robert)

billet simple とは、復路を伴わない往路のみの切符、つまり片道切符のことである。復路を伴う往復切符を指す (billet) aller-retour に対立する。mot simple は複数の語で構成された mot composé に対立し、単一の語のみで構成された語を指す。couleur simple も同様に、複数の

色で構成された *couleur composée* に対立し、単一の色で構成された色を指す。*nœud simple* とは、結び目が二重(以上)ではない、一重の結び目を指している。

これらの例は、ある名詞カテゴリー (X とする) に関して、二つ以上の要素で構成されている X が存在する一方で、一つだけの要素で構成されている X も存在し、X *simple* は後者を指示するという点で共通している。(7a) では往復切符に対する片道切符、(7b) では複合語に対する単一語、(7c) では複合色に対する単色、(7d) では二重結びに対する一重結びをそれぞれ X *simple* は指している。このような例の *simple* は「一つだけの要素から成る」ことを表していると考えることができる。印欧語根 *sem- の意味(「一」)を色濃く残す用法と言えよう。

X を構成する「要素」がなんであるかは名詞によるが、大部分は *simple* が修飾する X と同じ名詞で表現されるものである。例えば *un billet simple* は「切符」一枚から成る「切符」を指す。*mot simple* は一「語」で構成された「語」を指す。*couleur simple* も同様に、一「色」から成る「色」、*nœud simple* は一つの「結び目」からなる「結び目」である。この点はもう少し説明が必要かもしれない。*mot composé* を例にとろう。*mot composé* とは、二つ(以上)の *mot* が組み合わさり、新たに一つの *mot* になったものである。例えば *tire* と *bouchon* という二つの *mot* が組み合わさって *tire-bouchon* というそれ自体一つの *mot* になる。このように、X が組み合わさってできた存在は、それ自体一つの X なのである。

しかし、X と X を構成する要素が必ず一致するとは限らない。次のような場合も存在する。

(8) *passé simple*

「単純過去」とは一語で構成された過去であって、一つの過去で構成された過去ではない。単純過去を構成する要素とは、「過去」*passé* ではなく、「語」*mot* である。このような例では、X を構成する要素は、X ではない別のものである。

2.1.2. 用法 B 「他の X よりも少ない要素から成る X」

X を構成する要素が必ずしも一つとは限らない。次のような用法もある。

- (9) a. *robe simple*
b. *moyen simple*
c. *repas simple* (Robert)

例えば、(9a) は「飾りが少ないドレス」と考えることができ、飾りが一つでなければならないという決まりはない。二つ、三つあったとしても、それが話者や社会通

念で考えられる他のドレスよりも少なければ *robe simple* と呼ぶことができる。(9b) も同様に、ある目的を達成するために、普通考えられる *moyen* よりもやるべき手順等が少なければ *moyen simple* と呼ぶことができる。このように、X を構成する要素が必ずしも一つとは限らない用法もある。厳密には「一」を表さないこの用法も、「一」との強いつながりを認めることができる。「要素が少ない」とは「より一つに近い」ということだからである。いわば用法 A は絶対的な意味での「一」であり、用法 B は相対的な意味での「一」であると言うことができる。

用法 A とのもうひとつの違いは、B の用法は A のように対立する存在が明確ではないことである。*mot simple* には対立概念 *mot composé* が存在するが、*robe simple* には *robe composée* のようなものはない。*robe simple* と *robe non simple* は連続的である。そのため、用法 A は生産性に欠けるのに対し、用法 B は様々な名詞と結びつくことができ、生産性が高い印象を受ける。例えば、次のように任意の名詞と組み合わせると、用法 A の解釈は不可能だが、用法 B の解釈をすることは、多少強引だとしても可能である。

- (10) a. C'est un livre simple.
b. C'est un film simple.
c. C'est un café simple.
d. C'est une table simple.
e. C'est une musique simple.

人の性格を表す *simple* も同様に相対的な意味をもつ。

- (11) a. C'est une bonne fille, mais un peu simple.
b. *personnes simples, d'entendement épais* (Robert)

これらの例で *simple* が表しているのは、知性が一つしかないということではなく、通常の *filles*、*personnes* に比べ知性が少ないということである (Robert は « Qui a peu de culture, de finesse, d'intelligence » と注釈している)。

辞書類は物を修飾する場合と人を修飾する場合を区別しているが、*simple* の意味用法という観点からより重要なのは、人の性格を表す *simple* が相対的な「一」に相当する意味価値をもつ点である。

2.2. 前置修飾

前置修飾の *simple* は、辞書ではその用法が区別されていないが、本稿では三つの用法に区別する。

2.2.1. 用法 C 「一種類のみの要素からなる X」

- (12) *simple vérité* (Robert)

この例には « *vérité toute nue, sans apprêt* » という注釈を与えることができる。かつてはこの意味で名詞の後に置くこともあったようで、その名残が現在でも使用される *banqueroute simple* 「(偽装ではない) 純然たる破産」に見られる。この用法の類義語に *pur* を挙げることができ、また *pur et simple* と等位接続された成句も存在する。さて、*simple vérité* とは、真実以外の要素を含まない真実、「真実だけから成る真実」と捉えることができる。一見用法 A と類似しているが、大きな違いがある。例えば *mot simple* は *mot* を構成する要素 *mot* が「一つ」であり、それ以上を含まない語を指す。つまり要素の数量が問題となっている。それに対し、*simple vérité* は *vérité* の数量が問題なのではなく、*vérité* を構成する要素が *vérité* 一種類のみであり、それ以外の要素を含まないことを表す。すなわち、要素の質が問題になっている。「*Qui est uniquement (ce que le substantif implique), à l'exclusion de tout autre caractère (non exprimé).*」 「あらゆる他の性質を排除して、名詞が含意するもののみである」という Robert の記述はこの点をよく表している。

また X を構成する要素が「一種類」であるということに「一」とのつながりを認めることができる。

この用法の例が *simple vérité* 以外に見つかっていないため、類例として *pur et simple* の例を挙げる。

- (13) a. *pure et simple liberté*
b. *donation pure et simple*. (TLFi)

(13a) は、*liberté* にも様々なタイプがあるが、当該の *liberté* は *liberté* 以外の性質を含まない *liberté*、つまり本当の意味での自由を表す。(13b) も *donation* 以外の性質をもたない *donation*、純粋に贈与であってそれ以外の意図をもたないような贈与を表している。

2.2.2. 用法 D 「X のみでありそれ以外はない」

- (14) a. *Je désirerais un simple renseignement*.
b. *Il dit qu'il ne se contentera pas de simples excuses*.
(Larousse)

(14a) の文は、「私が望むのは *renseignement* であって、それ以外のものは何もない」と記述できる。(14b) は「*excuses* だけで、それ以外のものがない (のであれば満足しない)」という意味を表わす。この用法は、これまでの用法 A・B・C に見られない大きな特徴がある。それは、X と X 以外の存在との関係が問題になっている点である。次の例を見てみよう。

- (15) *Le service est ouvert à tous. Par un simple appel (non surtaxé), toute personne qui le souhaite peut entrer en contact avec une sage-femme diplômée.* (<http://www.radins.com/>)

dossiers/actu/)

この文は「助産師に相談をするために、アポイントメントをとったり、直接事務所を訪れたりする必要はなく、電話をするだけでよい」と理解できる。つまり *simple* は、*appel* 「電話をかけること」という X とそれ以外の行為 *prise de rendez-vous* 「アポイントメントを取ること」*visite au bureau* 「事務所を訪れること」との関係の問題にしている。一方、用法 A の *mot simple* は当該の *mot* とそれ以外の *mot* (*mot composé*) との関係が問題になるのであって、*mot* 以外のもの (*son*, *phrase* 等) は問題にならない。用法 B でも *robe simple* は、当該の *robe* と他の *robe* との関係が問題になるのであって、*robe* 以外の存在 (*chemise*, *t-shirt* 等) は問題にならない。このことからわかるように、用法 D では、*simple* の意味射程は名詞句を越えて、その外部にまで及んでいる。

さて、このような違いがあるものの、この用法においても「一」とのつながりは強く感じられる。(15) を例にとるなら、「電話をかけるという行為一つで ...」と理解できるからである。数量が一つであってそれ以上の数ではないことを表す *seul* との違いにも注意したい。

- (16) *Par un seul appel, toute personne...*

seul を用いたこの文は、*appel* の数 (回数) が一つであって、それ以上多くではないということを表す。しかし *simple* が表す「一つ」とは一種類という意味であり、量的な「一」を表す *seul* との対立において *simple* は質的な「一」を表すと特徴づけることができる。

2.2.3. 用法 E 「X であり X 以上のものではない」

- (17) a. *simple figurant*
b. *simple hasard*
c. *simple formalité* (Robert)

これらの例はそれぞれ「エキストラ / 偶然 / 形式上の手続きであってそれ以上ではない」という意味を表していると理解できる。それ以上とは、(17a) であれば « *protagoniste* » 「主役」のことであり、(17b) であれば « *nécessité* » 「必然」である。(17c) は、それ以上にあたるものを一語で表すのが困難だが「内容の伴った手続き」等と言い表すことができる。実例を見ると、X に対立して想定されるそれ以上のものがなんであるかさらに理解しやすい。

- (18) *Cinq jours après l'accident de voiture qui a causé la mort du dissident cubain Oswaldo Paya, les autorités cubaines ont présenté vendredi un long rapport concluant à un simple accident dû à un excès de vitesse, sans impliquer*

un autre véhicule comme le suggéraient les proches de la victime. (<http://www.leparisien.fr/flash-actualite-monde/mort-du-dissident-cubain-paya-la-havane-confirme-un-simple-accident-27-07-2012-2104576.php>)

キューバの反体制組織に属する人物の死亡事故を伝える記事である。亡くなった人物の性質上、仕組まれた犯行、事件である可能性が想定されている。この例では、「事件」が事故以上の存在に当たり、当該の出来事は、事故であってそれ以上（つまり事件）ではないことを表している。このように、この用法の *simple* も、X と X 以外の存在の関係を対象としており、その点において用法 D に非常に近い。用法 D との違いは次の点にある。用法 D は X 以外の存在が X に加わらないことを表すが、用法 E は X 以外（そして以上）の存在ではないことを表す。次の例は二通りの解釈が可能である。

(19) Un simple ventilateur ne suffit pas pour se rafraîchir.

用法 D の解釈では、涼しくするには扇風機だけでは十分ではなく「扇風機に加えて」扇風機以外のもの、例えばクーラーが必要であるという解釈になる。用法 E の解釈では、涼しくするには扇風機では十分ではなく「扇風機ではなくて」扇風機以上の別のもの、例えばクーラーが必要であるという解釈になる。用法 D は X と他の存在が加算的な関係にあり、用法 E では選択的な関係にある。

さて、用法 E も「一」に通じる意味をもつが、少し説明が必要である。この用法は、何かが「X であってそれ以上ではない」ことを表す。つまり X であることは他の存在以下に当たる。ここに「一に近い」、つまり相対的な意味での「一」を見出すことができる。

3. 各用法のまとめと関係性

simple の後置修飾、前置修飾それぞれの用法を、共通点と相違点がわかるようにまとめ直すと次のようになる。

- 用法 A 「X を構成する要素の数が一つであって、それ以上ではない」 ex) billet simple
- 用法 B 「X を構成する要素の数が他の X 以上ではない」 ex) robe simple
- 用法 C 「X を構成する要素の種類が一つであって、それ以上ではない」 ex) simple vérité
- 用法 D 「X 一種類であって、それ以上ではない」 ex) Par un simple appel...
- 用法 E 「X であってそれ以上ではない」 ex) simple figurant

用法 A・B は、X を構成する要素の数量が問題になっているという意味において量的な用法である。用法 A はその要素の数が絶対的な意味で一つであることを表し、用法 B は相対的な意味で一つ（に近い）ことを表す。用法 C は要素の数量ではなく、種類が問題になっているという意味において質的な用法である。用法 D・E は X を構成する要素が問題ではない点において用法 ABC とは区別される。X と X 以外の存在が問題になり、用法 D は X だけであって、X に X 以外の存在が加わらないことを表し、用法 E は X 以上ではないことを表す。

4. おわりに

本稿の考察の要点は 3 節にまとめられるので、最後に結論に代えて、形容詞 *simple* の位置と意味の関係の問題に一言触れておきたい。*simple* を後置修飾することによって、用法 A・B・C のような意味が生まれるメカニズムは、後置修飾の *simple* の意味が分類的である点に関係があるように思われる。後置修飾の *simple* の意味役割は、結局のところ、名詞句 X を構成する要素の数量によって X の内部に区別を立てることである。billet simple における *simple* は切符の数によって billet を billet simple とそれ以外 (billet aller-retour) に区別しており、robe simple における *simple* は飾りの数によって robe を robe simple と robe non simple に区別している。これはいわゆる品質形容詞の分類機能 (cf. Milner 1978) である。例えば une voiture bleue という名詞句において bleue は voiture を voiture bleue とそれ以外の voiture に区別している。

一方 *simple* を前置することによって用法 D・E のような意味が生まれるメカニズムは、これらの用法における *simple* の意味が名詞句を越えた範囲 (X とそれ以外の存在の関係) にまで及んでいることに関係があるように思われる。名詞に対して前置後置どちらも可能な形容詞が前置修飾されることによって、より広い範囲が意味の対象となる現象は他の種類の形容詞にもみられる。その一例は山本 (2011) で論じた fichu, foutu, sacré 等の情意形容詞である。

(20) Le front dans ses mains, il tente de réfléchir. « Mais où peuvent-elles bien être ces fichues clés ? Sur le toit peut-être ? On ne sait jamais », lorsque tout à coup il les aperçoit. (Simone Minardi, La Gifle, et après : 137)

これらの形容詞が前置修飾されるとき、その意味の対象は名詞句だけでなく文脈、発話される状況にまで及んでいる。*simple* の前置と意味の関係もこの点が鍵となっているように思われるが、今後さらなる考察が必要である。

参考文献

- Blinkenberg, A. (1933), *L'ordre des mots en français moderne*, 2, Kobenhavn, Munksgaard.
- Bonnard, H. (1992), *Code du français courant*, Paris, Magnard.
- Bouacha, A. (1994), « Simplement, opérateur méta-discursif », *Cahiers du français contemporain*, 1, 293-306.
- Charolles, M., & Lamiroy, B. (2007), « Du lexique à la grammaire: seulement, simplement, uniquement », *Cahiers de lexicologie: Revue internationale de lexicologie et lexicographie*, (90), 93-116.
- Foresgren, M. (1978), *La place de l'adjectif épithète en français contemporain : étude quantitative et sémantique*, Studia Romanica Upsaliensia.
- Lenepveu, V. (2002), « Adjectifs et adverbes: une corrélation syntactico-sémantique », *Le français moderne*, 70(1), 45-70.
- Milner, J. C. (1967), « Esquisse à propos d'une classe limitée d'adjectifs en français moderne », *MIT Quarterly Progress Report. Research Laboratory of Electronics*, 84, 275-285.
- Milner, J.-C. (1978), *De la syntaxe de l'interprétation. Quantités, insultes, exclamations*, Paris, Seuil.
- Noailly, M. (2002), « Le cas de simple », *Langue française*, 136 (1), 34-45.
- Nølke, H. (1996), « Où placer l'adjectif épithète? Focalisation et modularité », *Langue française*, 111, 38-58.
- Reiner, E. (1968), *La place de l'adjectif en français. Théories traditionnelles et essai de solution*, Vienne-Stuttgart, W. Braumüller.
- Renaud, F. (1998), « Seul : quantification et argumentation », *Revue de Sémantique et de Pragmatique*, 4, 11-43.
- Salles, M. (2001), « Hypothèse d'un continuum entre les adjectifs «modaux» et les adjectifs qualificatifs », *L'Information grammaticale*, 88(1), 23-27.
- Salles, M. (2004), « Adjectifs «modaux» et adjectifs qualificatifs », *L'adjectif en français et à travers les langues*, Caen, PUC, 463-474.
- Schnedecker, C. (2002), « Présentation : les adjectifs "inclassables", des adjectifs du troisième type ? », *Le français moderne*, 136 (1), 3-19.
- Watkins, C. (2000), *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, 2ème éd. Boston, Houghton Mifflin.
- Waugh, L. R. (1977), *A semantic Analyses of Word Order. position of the Adjective in French*, Leyde, Brill.
- Wilmet, M. (1993), « Sur l'antéposition et la postposition de l'épithète qualificative en français. Apologue linguistique », *Revue de linguistique romane*, 57, 5-25.
- 山本大地 (2011) 「情意形容詞 fichu について」『フランス語学研究』 45, 37-51.